

## 今の自分ができること

羽島市立桑原学園 九年 馬場 悠生

わたしは今学校で「児童生徒会長」を務めています。「生徒会長」という役職名でないのはわたしの学校が、義務教育学校という種類の学校だからです。

桑原学園は、今から六年前、わたしが三年生の時に小学校と中学校が一つになって義務教育学校になりました。当時県下二校目。全国的に増えており現在は全国に百五十一校、県下には六校あります。

義務教育学校は、一年生からわたしたち九年生までが一つの学校で生活しています。二年生の子と隣合って廊下掃除したり、一年生の子と花の種をまいたり。小さな子たちの笑顔や素直な反応にはいつも心が癒されています。異学年の子と共に生活する毎日はとても賑やかです。授業は、一年生から教科担任制が導入され、例えばわたしは、三年生の時から同じ先生に音楽を教えてもらっています。内容は難しくなっても、先生

ややり方が変わらないため中学生になることにそんなに不安はありませんでした。

それでも「少子化」の波は肌で感じ、漠然とした未来への不安は感じています。わたしたち九年生は十九人ですが、二年はわずか十人、一年生も十二人です。しかしこれは何も桑原町だけの問題ではありません。

日本では、少子化や過疎化により、学校の統廃合が進んでいます。そのため、全国の公立小中高校など四百〜五百校が毎年新たに廃校になっていて、文部科学省の報告では、令和三年五月一日の時点までの十年で廃校となった公立学校は実に八千五百八十校。学校は地域コミュニティーの中心で「自分もお母さんもおじいちゃんもそのまたおじいちゃんも通った母校」という家庭は少なくありません。わたしの家もそうです。その「母校」がなくなるとしたら喪失感はどれほどのものか。災害時には避難所にもなる重要な拠点でもあります。わたしの学校が廃校ではなく義務教育学校として舵を切ったのはそうした地域の思いを受け止めた結果でもあると思っています。

もちろん良い面ばかりではありません。二十人もいない九年生で他の八学年を引っ張っていくのです。キャンペーン一つ取り組むのにも九学年それぞれの行事があつて予定が決めにくい上、発達段階が全く違うのでそれを踏まえた方法や内容を工夫しなければなりません。先日、深く考えず一年生に説明に行ったら、質問の嵐で、予定よりずいぶん時間がかかつてしまいました。また、横の学年の人数が少ないことは変わらないため、やりたくなくても自分が動くしかない場面もあります。実際に、この主張の大会に出場するのも十九人の中から推薦された二人です。不安でしたが、先生に推薦されたのだから頑張ればやり切れるはずと捉えて準備してきました。きつと、代々の先輩も同じ心境だったと思います。このようにわたしたちは、少ない人数ながらも自分が貢献できることは自分がやろうと努力する、できないことはできる人にやってもらい全力で協力する、そしてやってもらったことに感謝の気持ちをおぼれたい。この大切さを感じながら生活しています。

地域の方々も同じです。Uさんのお父さんは練習し

やすいようグラウンドの除草をして下さっていました。学校の玄関に常にある華やかな花々は、地域のMさんが持ってきて生けてくださっているもの。立派な門松は、Hさん手作り。下校するとき、いつも見守りに出てくださっているのはすっかり顔馴染みのYさんHさんBさん。すぐに地域の方々の笑顔が浮かびます。わたしたちを、学校を、地域を、そしてこの国を大切に思い、今自分が貢献できることをしてくださっているのだと思います。この先日本が向かっていく少子化は、個人で立ち向かうには大きすぎる問題かもしれません。しかし、一人一人がその時の自分が貢献できることを精一杯する。協力する。感謝する。これが続けていけばきつと未来は開ける。桑原学園での日々の中でわたしはそう信じていけます。そのためにもまずは児童生徒会長として自分が貢献している姿を全校の仲間を示していきます。